

市内に三つの宿場

高島市内の湖辺を南北にはしる西近江路は、古代より畿内と北陸を結ぶ主要街道でした。近世には北国海道とも呼ばれ、琵琶湖の湖上交通とも結びついて人や荷物が多く行きかい、宿場町が繁栄しました。滋賀県内にあった北国海道沿いの七宿のうち、高島市内にもマキノの海津宿、今津の今津宿、新旭の川原市の三宿がありました。



川原市宿場跡付近

ほっこくかいどう
北国海道と

川原市宿

湖に面していないことから他の宿と比べて小規模であったと考えられています。他宿と同様、人馬提供による輸送を行い、南の小松と北の今津を結ぶ陸運の便を図る役目を担っていました。

馬方又左衛門の逸話

川原市にはこの役目を担った馬方の一人である馬方又左衛門の、次のような逸話が残っています。

加賀の飛脚が、京都の屋敷まで大金を届けるため北国海道を旅していました。川原市で馬を乗り継いだ際に鞍に財布を忘れてしまい、和邇の宿で途方に暮れていたところ、川原市の馬方が和邇まで財布を届けてくれました。飛脚は大層感謝しましたが、馬方はお礼も断り、「せめてこれだけは受け取ってほしい」と、飛脚が渡した少額の金子もその場で酒と肴に換え、宿の者も交えて酒を酌み交わ

したと伝わります。

この馬方の行いは、中江藤樹の「親には孝行せよ、嘘はつくな、人の物はとるな」という教えに基づいたものであった、と言われています。

この話に登場する馬方は、名を中西又左衛門といい、川原市にある又左衛門の屋敷跡には、藤樹学の権威として知られた西晋一郎氏の揮毫によって建てられた石碑が立っています。

川原市の一里塚

また、川原市には街道の名残として、一里塚跡が残っています。

一里塚とはその名のとおりの一里(約4km)ごとに置かれた塚で、古くから旅人の道しるべとなっており、人々の往来を見守ってきました。『高島郡誌』によれば、市内では、木津や海津など七か所に一里塚があったと伝わりますが、そのうち



川原市の一里塚跡

の一つである川原市の一里塚は、平成18年(2006年)に市の指定文化財に指定され、当時の面影を今に伝えていきます。

図文化財課

☎(32) 4467

編集感

スポーツ、食欲、読書など、秋はさまざまなことに挑戦できる季節です。皆さん今年はどんな「秋」を過ごされるでしょうか。色んな側面を見せる秋ですが、「防災の秋」という呼び方もあるようです。地震や台風など、さまざまな災害が生活を襲っています。枕元に非常用持出袋を置いたり、避難場所を確認したりと、すぐにできることはたくさんありそうです。今、自分にできることは何か、少しだけ考えてみましょう。(M)